

また導師論に於ては單に脱迹の佛を捨つる事を知り種本の本佛を仰ぐ事を忘れ宗祖本佛の下尅上の邪義に陥つてゐるやうである。

たどるべき道

吉 田 孝 秀

挽近、物質文明の進歩に伴ふ弊害として、道德宗教の衰頹した事を頻りに慨嘆するのが一般識者の通説の如く思はれるが、此れを大局から公平に見たならば、物質文明の進歩は一面弊害を免れないが、現代に於て此の物質文明、機械文明程偉大なる貢献を人生に齎したるものは恐らく他に其比を見ないであらう。無論他面道德宗教等の衰頹は事實であるが、畢竟其は道德宗教の力がその社會に權威を持たなかつた結果生じた所の弊害でその責は當然「自ら」負ふべきであると私は思ふ。

物質文明の進歩に依つて衰頹を來す様な道德宗教は、何としてもその時代に力のないものであつたと言ふの外はない。然も精神界の多くの人達は依然として時代錯誤の舊套を脱し得ないで、頹勢を挽回する事のみ苦惱してゐるが、むしろ我々は速かに一切を擲つて、先づ精神生活の第一義に醒め自由な

る自我に還れと叫ばなくてはならない。そうした處に初めて困陋なる偏見から解放され、昏睡から目覺めて、眞に赤裸々なる生命力の進路を見出し得る事を確信するのである。斯くして得た處の更に高く、大きな道徳及び宗教であつてこそ、初めて時代を教へ眞に民衆を指導するに足るの力あるものだと信じてゐる。

日蓮上人が正嘉、正元を経て文應元年庚申の春迄の永い間にわたつて岩本經藏に於て一切經を閲覽遊ばされ、而も其後數回、事に觸れ時に當つて大藏經を讀破された其御心持こそは這般の消息を語るものではなかるふか。最澄（傳教）や空海（弘法）の如き當時文化を誇つた支那よりの新歸朝者の高僧達こそ所謂「一世を風靡した時代の新智識」と言ふのである。而も彼等には常に彼等の主張する立場があつた。只聰明なる智解に依て天台を究め、眞言を傳承したに過ぎない。其他各宗の大師、論師は何れも是れに淺深の相異こそあれ殆ど轍を同じうする事は今更蕩々たる言を待たない。

斯くして遂に佛法の歸趨する處を誤り教主釋尊の本意を失墜するに至つたのである。吾が日蓮上人の法華經行者としての活躍は全く此れと反對の立場から何物にも遮られず何物にも割せられず最も自由なる飛躍に依つて得られたので、所謂涅槃經の「法に依て人に依らず義に依て語に依らず、智に依て誠に依らず」を其儘體驗せられたのである。「日蓮は何れの宗の開祖にも非ず又末葉にも非ず。」と

仰せられ、「弘法は智者なるが故に一を三と讀み、日蓮は愚者なるが故に一を一と讀む。」等の切實なる多くの御遺文を拜すれば如實に祖師の御意を竊ふことが出来る。この純眞なる精神の全要求に對して與へられたのが法華經であり、従つて此の法華經に説示されたる教へこそ人生最高の原理であり、最も完全なる生命の源泉であらねばならぬ。而も本化の佛使日蓮上人のこの先人未踏の法華經の行者として一天四海皆歸妙法の大旆を掲げ攝受折伏、時に應じて一期を妙法の弘通に捧げ、權威ある宗教を末法の社會に徹頭徹尾行き渡らしめんと六十一年の生涯猶足らざるの御精進を偲び奉る時、誰かその尊さに感激せざるものがあるふか。「鳥と虫とは鳴けども涙落ちず日蓮は泣かねども涙ひまなし」と或は「日蓮は日本六十六ヶ國島二つの内五尺に足らざる身の一つ置く所なし」等の御遺文は一讀よく上人の全生活を伺ふに足る。警鐘は既に亂打された。吾々は常に一切の偏見を捨て、純なる魂と溢るゝ熱情とに依つて眞摯なる一道を辿り、宗祖の所謂、「和黨」として努力精進以て向上の一路に、邁進すべきである。

哲學的部門より觀たる台、當兩家

黑 崎 政 信